

月報

54号

発行所

青丘文庫

編集・発行★韓 哲 曦

〒654 神戸市須磨区須磨寺町4-3-1

メゾンド青丘ビル2階

TEL(078)734-5989 FAX 735-0660

《第5回 日韓在日キリスト教関係史研究会》(3月24日)

「日本組合教会の朝鮮伝道

——渡瀬常吉を中心として——」 李 省 展

渡瀬常吉(一八六七—一九四四)は海老名義正の弟子で、一八九九年、押川方義(横浜バンド)の推挙によって、ソウルの京城学堂長となる。しかし、京城学堂の経営母体である大日本海外教育会は、伊藤博文をはじめ、政財界有力者によって支えられている侵略的意図を内包する団体であった。一九〇七年、渡瀬は神戸教会の牧師となり、一九一〇年「日韓併合」を契機として日本組合教会内に朝鮮伝道部が設置されると、その主任としてソウルに赴任する。教勢は飛躍的に拡大するが、財源の一部には同化政策推進のためにキリスト教を利用しようとする寺内總督の多額な機密費も含まれていた。

渡瀬は「日韓併合」とその同化政策を全面的に肯定し、キリスト教と天皇制は対立しないと見做すとともに、朝鮮の教化はキリスト教でなければ困難であると断定した。

渡瀬は、三・一独立運動に対しても「政治的迷信団」に過ぎないとし、独立の美名のもとに鎮国主義を主張するものであるとした。小さな鎮国主義よりも大きな大陸発展の理想を求めよと述べ、同化政策を肯定した上で、三・一独立運動批判を展開した。さらに水原における虐殺も官吏の過失であるとし、それを擁護する姿勢を貫いている。

これに対して組合教会内部では、柏木義円が渡瀬の三・一独立運動に対する見解を批判するとともに、①總督府寄

付の謝絶、②渡瀬の伝道方針の改変、③組合教会の渡瀬の伝道との関係遮断を求めたが、渡瀬、組合教会からも黙殺された。

一九二〇年、渡瀬の伝道方針は「朝鮮人を日本臣民たらしめること」から「文化的理想の実現」へと転換。これは同化政策を根本的に改めるものではなく、武断統治から文化統治への転換に対応するものにすぎなかった。

一九二二年、朝鮮伝道部が突如廃止される。これは、斎藤總督の政策転換による財源の欠如、あるいは三・一独立運動を契機とした教会員の急速な減少にその原因を求めることもできるが、一九一九年の呂運亨事件と組合教会朝鮮伝道部との関係により決定的な原因があると考えられる。

上海臨時政府の呂を懐柔しようとする日本招聘を画策したが、渡瀬をはじめとする朝鮮伝道部であった。しかし、渡瀬や政府の思惑とは反対に、呂は朝鮮独立演説をぶち、原内閣が窮地に立たされ、政府の組合教会に対する信頼は失墜する。渡瀬はこの責任をとることなく、一九二二年、朝鮮をひきあげ組合教会總務部長の重責に就いた。

一九三四年、新宗教会を創設し、「満州国」伝道を開始するが失敗する。さらに、聖書と古事記は内容が一致するという日本神学を提唱。一九四〇年には八紘一宇の理想を立てる帝国に献身することを趣旨とする興亜神学院を創立した。

近親者評によると、渡瀬は主観的には朝鮮人を愛していたようだが、朝鮮人の民族独立を理解することができず、柏木も指摘するように、結果的には「日本帝国主義の手先」としての役割を果たしたと言わざるをえない。

在日朝鮮人運動史研究会 第一二〇回例会

(一九九〇年四月八日)

八尾市を中心とした阪神教育闘争について

岡本 喜代美

先日、卒論を発表させていただいた。卒論作製にあたっては、様々な方のご協力をお借りし、かなりキリんで取り組んだものの、正直いって期日の前日に出来上がるという結果となってしまうたが、御礼の意味と私自身の問題意識を育てていくために報告させていた

私自身が、このテーマを選んだのは、私自身が教員志望であり、日本の教育を担って行く者として、教育における戦後責任を取っていかねばならないと考えたからである。戦後、軍国主義教育への批判は成され、民主的教育にあたかも改革されたかにみえるが、実際は他民族を抑圧をしていった「同化・排外」教育についての総括は今だ成されていないといえる。

特に、戦後の民主改革の中でさえ、なぜ民族教育は弾圧されていたのかとても疑問であった。そこで、阪神教育闘争を取り上げ、なぜ民族教育が弾圧されていたのか、また当時の在日朝鮮人たちの教育への要求の中心は何であったのかにポイントを当てていこうと考え取り組んだ。

結果的にまとまった答えは、何もでなかったが、私自身の感想というところで述べたいと思う。まず、この問題の規模の大きさに驚いた。当時の大阪の人口のおよそ1/3の人が、大手前公園の集会に参加している。それだけでもこの闘いへの強い要求を感じる。

そして、その「教育要求」の中身は何であったのか。民族として生きることが奪われて来たことから、同化教育への強い抵抗があったことは言うまでもないことであるが、今回の卒論では、具体的な要求内容を取り出すことはできなかったが、今後一つ一つ、つぶさに見ていく必要があるのではないかと思う。

私が卒論を取り組んでの考える要素として、もう一つ「教育権の保障」についての側面も、もっと具体的に「教育内容」にまで踏み込んで見ていかねばならないのではないかと思った。

日本の統治下の中で、教育を奪われた親たちの「子どもには無学の苦しみを味あわせたくない」という思いに、もっと寄り添っていくべきではないかと思ったのである。

卒論では、一世の聞き取りができず、また当時の生の資料を集められずに終わったことは残念である。

朝鮮民族運動史研究会 第九一回例会

(一九九〇年三月一日)

申采浩の「無政府主義東方連盟事件」について

館山英夫

申采浩の「無政府主義東方連盟事件」の第一回公判は一九二八年一月一日、大連地方法院刑事法廷で開かれたが、刑の確定は翌翌年の三〇年七月九日(別説五月九日)で、長期間の裁判であった。現在、事件の輪郭を伝えるのは当時の新聞記事で『朝鮮日報』『東亞日報』他であるが、前者は比較的逐次に事件を追ひ、後者は申采浩の陳述記録に特徴が見られる(全集収録)。しかし記事中には確証を要するものが少なく、事件の全貌解明には裁判記録等の発掘が望まれる。とりわけ中国側資料が持たれる。運座したのは台湾人林炳文(第一回公判までに拷問死)、李弼鉉(李志永)、義烈団員李鍾元、中国人商人楊吉慶(中途無罪釈放)の四名で二〇代の青年連であった。その嫌疑は「治安維持法違反、有価証券偽造行使詐欺、殺人及び屍体遺棄」である。

「無政府主義東方連盟」は申采浩の陳述によれば綱領も入会誓約もなく、過去に行動例すらない、不定の行動体であった。これを、同じく無政府主義を標榜して「在中国朝鮮無政府主義連盟」(二四年)、「在中国朝鮮無政府共産主義者連盟」(二八年)を結成した在中朝鮮人アナキスト李会榮、李乙奎、李丁奎等と対比すれば、少数による直接行動を志向した純正無政府主義組織と、一応は括れよう。

逮捕の直接契機となった「有価証券偽造行使詐欺」とは外国為替を偽造して現金の取得を目論んだものだが、二八年四月下旬に挙事して翌五月上旬には全員が逮捕された。

「殺人及び屍体遺棄」容疑は李弼鉉、李鍾元等による密偵金天友の殺害で李弼鉉は否認し、李鍾元は是認して始まり、証拠が無いため曲折を経る。申采浩は当事者でないが北京で同宿の李弼鉉の無実を証言した。ただし金天友殺害には義烈団員羅錫暉の「東拓爆弾事件」(二六年一月)が関与し、官憲資料には申采浩と李弼鉉が関係者のなかに挙げられている(『高等警察要史』)。大連地方院は北平(北京)・天津へ実地検証に向くが、その如何なる調査結果に由るものか、確定判決は李弼鉉死刑、李鍾元無期懲役、申采浩懲役一〇年であった。

申采浩の決起は民族史学者として精力的に朝鮮史研究に没頭していた時期に当たり唐突の観も与える。しかし臨政以来、申采浩は一貫して武闘主義路線に立脚して独立軍統一を目指す政体形成に関わってきた。それ故その挫折(二三年五月「国民代表会議」決裂)は深く影響したが、ほぼ同時期の「人民衆」との逢着(「朝鮮革命宣言」)は、民族主義者申采浩を国家主義の桎梏から解放させた。二〇年代後半の申采浩は民族主義を次第に深化させて行ったものと思われる。無名の民衆の一人として挙事に参画した事に申采浩の決意の深さが窺われる。申采浩連の行動には金元鳳(若山)、柳子明等の言動に相違するものが想定され申采浩と「新幹会」との関わりも今後、猶解明の余地を残していると考えられる。

新図書案内

- 韓国史研究 {58-66} 韓国史研究会 ソウル 同所 87年-89年
 亜細亜研究 通巻 第80、81号 高麗大学亜細亜問題研究所 ソウル 高麗大学
 한국역사연구회 회보4 한국역사연구회 서울 청년사
 大東亜戦史 満州編上、下 池田 佑 東京 富士書苑 69年
 한국독립운동사연구 제3집 독립기념관 한국독립운동사연구소 충남
 特高警察体制史 {社会運動抑圧取り締まりの構造と容態} 荻野富士夫 せきた書房
 満州事変 現代史資料7 小林 龍夫、島田 俊彦 東京 みすず書房 64年
 ミクロネシア民族誌 松岡 静雄 東京 岩波書房 43年 p687
 民族文化研究 第17-22号 洪 一植 ソウル 高大民族文化研究所
 史學研究 第39、40号 韓国史學會 京畿 同所 87年
 歴史學報 第117-123号 歴史學會 ソウル 同所 88年-89年
 韓国文化8 ソウル大学韓国文化研究所 ソウル 同所 87年
 韓國史學 6-10 歴史研究室 ソウル 韓国精神文化 85-89年
 東亜文化 第18-26号 東亜文化研究所 ソウル 同所 85年-89年
 부정기간행물 1호 창작과비평 白樂晴 " 批判社
 창작과비평 金基洙 " 창작과비평
 在日60年、自立と抵抗 {在日朝鮮人運動史への証言} 張 錠寿 東京社会評論社
 朝鮮芸能史 李 杜鉉 東京 東京大学出版会 90年
 中国朝鮮族歴史研究 参考資料編 第1号 延辺 延辺大学出版会 89年
 日本植民地下の朝鮮思想状況 朴 慶植 東京 三一書房 89年

研究会御案内

〈在日朝鮮人運動史研究会〉 第122回例会

日 時 1990年5月13日〔日〕 午後2時

テーマ 大阪朝労、大阪事件について

報告者 金森 襄作氏

〈朝鮮民族運動史研究会〉 第93回例会

日 時 1990年5月20日〔日〕 午後2時

テーマ 日帝下朝鮮における戦争犠牲者の統計と検証

報告者 飛田 雄一氏

〈日韓、在日キリスト教関係史研究会〉 第7回例会

日 時 1990年5月26日〔日〕 午後2時

テーマ 私とキリスト教

報告者 金 哲顕氏

・場所はいつでも 青丘文庫にて